現代日本語における語結合
―日本語「連語論」再検討―

Word-Combinations in Modern Japanese

岡　田　幸　彦*

OKADA, Yukihiko

0. はじめに

文中において，成分同士が対等に結びつき合っているのでなく，二つ以上の成分がまとまりを作っている場合がある。以下の文には，成分同士のまとまりが存在する。

(1)（つまらない約束をするんじゃなかった）
　信夫はいくども後悔していた。（塩狩・68）
(2) しごく客観的に言うのなら，教官の説明に誤りはない。（椿山・53）
(3) ひとみはメールソフトを開いたまま 顔を 両手で覆った。（レイン・97）

例1では，「つまらない」が「約束」の性質を表していて，文中で二つの成分「つまらない　約束を」がまとまりを作っている。

例2では，「客観的に」が「言う」という動作の様子を表していて，文中で二つの成分「客観的に言うのなら」が一つのまとまりを作っており，また，「教官」が「説明」する人を表していて，二つの成分「教官の　説明に」がもう一つのまとまりを作っている。

例3では，「メールソフト」が「開く」という動作を受ける対象を表していて，文中で二つの成分「メールソフトを　開いたまま」が一つのまとまりを作っており，また，「顔」が「覆う」という動作を受ける対象を，「両手で」がその動作の手段を表していて，三つの成分「顔を　両手で　覆った」がもう一つのまとまりを作っている。

以上，二つ以上の語の間の意味的な関係に基づいて，文中の成分同士がまとまりを作っている例を見てきたが，このようなまとまりは文法記述の対象になるだろうか。

1. 文中における語と語の結合

1.1. 奥田（1968-72）他による「連語論」

前節で見たようなまとまりを「連語」という名で文から取り出し文法の対象としたのは，奥田（1968-72）他，言語学研究会編（1983）[1]による，一連の「連語論」である。

奥田（1976）は，「連語」を以下のように定義している。

> もちろん独立語であるが，いくつかの，おおくのばあいふたつ，あるいはみっつの単語をくみあわせると，単語とおなじように名づけ的にはたらく連語ができあがる。…連語はいくつかの単語を構成要素にもっていて，そ

* おかだ・ゆきひこ
埼玉大学教育機構非常勤講師

れらのあいだには構造的なむすびつきがある。（奥田（1976：67））

ふつう，連語はふたつ，あるいはみっつの単語からなりたっていて，そのうちのひとつが核になっている。その核になる単語の語彙的な意味をせばめて，具体化するというし方で，ほかの単語が核になる単語にくみあわさる。…連語は，語彙的な意味の具体化をもとめて，ほかの単語をしたがえる《かざられ》と，そのかざられによりかかる《かざり》との，ふたつの構成要素からなりたっている。（奥田（1976：69））

それに続いて,「リボンを　むすぶ」と「かみに　リボンを　むすぶ」,「たまごを　わる」と「さらにたまごを　わる」,「くちびるに　べにを　ぬる」と「べにで　くちびるを　ぬる」,「神田君に　へやを　かりる」と「神田に　へやを　かりる」等の例に基づいて,「単語の構文論的な特性, valence」,「カテゴリカルな意味」【引用注：用語上の誤謬, categorical は「絶対的な」で,「範疇的な」あるいは「文法カテゴリーの」は categorial】,「構造的なむすびつき」等について論じ,「連語もそれ自身の内容と形式をそなえている言語の単位である。」「連語の研究を単語の valence の研究にすりかえるわけにはいかないだろう。」（同（同：84））と結論づけている。しかし,「核になる単語」「したがえる」「よりかかる」とはどのようなことなのか，また,「主語」を除いた上記の例を「連語」として取り出す根拠は何であるのかには，それ以上触れられていない。

また,「名詞+を　動詞」という「連語」について具体的に記述されている奥田（1968-72：22）では,「動詞が核になっていて，それをを格の名詞がかざっている連語」としているが,「名詞+を　動詞」という「くみあわせ」を「連語」として取り出す根拠や,「核」「かざる」とはどのようなことであるかについては言及されていない。奥田（1968-72）では，以下のような言い方がされているのみである。

対象へのはたらきかけをあらわす，を格の名詞と動詞とのくみあわせでは，かざり名詞が物や人，現象や状態や過程や関係などをさししめしていて，かざられ動詞でしめされる動作がそれになんらかのし方ではたらきかけていく。（同（同：23））

言語学研究会編（1983）では,「従属的なむすびつき」について,

ふたつの単語の従属的なむすびつきのみを連語とみなすのは，それが陳述的なむすびつきとは，ひとしく構文論的なむすびつきであるとしても，異質であるということの確認から出発する。じっさい，文のくみたてのなかに存在している従属的なむすびつきは，このむすびつきをつくっている単語の語彙＝文法的な特性に依存しているとしても，その単語が文のなかにしめているポジション，あるいは機能に依存していない。このことは，つぎの例をみれば，すぐに理解できる。

あの　人は　妻に　やさしい。
あの　人は　妻に　やさしい　男だ。
妻に　やさしいのは　あの　人の　きわだった　特徴だ。

きれいな　娘が　きた。
彼女は　きれいな　娘だ。
ぼくは　きれいな　娘に　であった。

ぼくは　飯を　たべて　いた。

ぼくは　飯を　たべながら　新聞を　よんで　いた。

飯を　たべて　いた　ぼくは　きゅうに腹が　いたく　なった。

ここでの「やさしい」という単語は，文のなかでどのような役割をはたすかということとは無関係に，「妻に」という単語を自分に従属させている。「きれいな」と「娘」とのふたつの単語のむすびつきについても，おなじことがいえる。「娘」という単語が「きれいな」という単語を修飾語としてしたがわせることができるのは，それが文のなかでしめている構文論的なポジションとはなんの関係もない。「娘」という単語の語彙＝文法的な特性がこの種の従属的なむすびつきをつくりだしている。おなじことが，「飯を　たべる」というくみあわせについてもいえる。（言語学研究会編（1983：5-6））

「妻に　やさしい」「きれいな　娘」「飯を　たべる」が「連語」として扱われているが，どのような形式的根拠でこれらを「従属的なむすびつき」と位置づけたのか明確ではない。

一方，「陳述的なむすびつき」については，

…「彼は　やさしい」とか「彼女は　きれいだ」というような単語のくみあわせでは，そのむすびつき方は modality と temporality とのプランのなかで成立していて，陳述的である。つまり，一方がものをさしだし，他方がそのものの特徴をのべるという，主語と述語との陳述的なむすびつきであって，それが modality と temporality とからきりはなされたところでは成立しない。この事実は，つぎのようなパラダイムをくんでみると，はっきりするだろう。

彼女は　美人だ。
彼女は　美人だろう。
彼女は　美人だった。
彼女は　美人だったろう。

「彼女は　美人だ」というくみあわせは，「彼女は　美人だった」というくみあわせと時間において対立しているとすれば，その構成要素である「彼女は」と「美人だ」とのむすびつきは，時間性をきりすてたところでは成立してはいない。また，このくみあわせは，「彼女は　美人だろう」というくみあわせと，たしかさのモダリティーにおいて対立しているとすれば，そこにあるむすびつきは，モダリティーからはなれたところでは成立していない。文としてはたらく単語のくみあわせは，はなし手の立場から現実のできごとをえがきだしていて，そのむすびつきは，必然的に陳述的な性格をおびてくる。（言語学研究会編（1983：6））

と述べられている。「彼女は　美人だ。」他が「むすびつき方は modality と temporality とのプランのなかで成立していて，陳述的である」根拠も明確であるとは言えない。

言語学研究会編（1983：12）では，「品詞のなかには文の構造化の結果としてうまれてきた単語の語彙的な意味，それにもとづく構文論的なむすびつきをつくる一般的な能力が一般化されて定着しているから」，「単語の品詞への帰属」が「連語論的なむすびつきをカテゴリーに一般化するにあたって」「問題になる」とされ，以下の「連語」の一

覧が提示される（同（同：13））。

名詞と動詞とのくみあわせ
　を格の名詞＋動詞
　に格の名詞＋動詞
　へ格の名詞＋動詞
　で格の名詞＋動詞
　と格の名詞＋動詞
　から格の名詞＋動詞
　まで格の名詞＋動詞
副詞と動詞とのくみあわせ
名詞と名詞とのくみあわせ
　の格の名詞＋名詞
　への格の名詞＋名詞
　での格の名詞＋名詞
　との格の名詞＋名詞
　からの格の名詞＋名詞
　までの格の名詞＋名詞
名詞と形容詞とのくみあわせ
　に格の名詞＋形容詞
　へ格の名詞＋形容詞
　で格の名詞＋形容詞
　と格の名詞＋形容詞
　から格の名詞＋形容詞

それに続いて，「動詞をかざられにする連語」を例にして，「連語はかざられになる動詞がかざりになる単語とくみあわさるのではなく，かざりになる単語の文法的なかたちとくみあわさる」（同（同：13-14））と述べられている。この「文法的なかたちとくみあわさる」という部分が，ようやく「従属的なむすびつき」を文法記述の対象としうる手がかりになるであろうか。

1.2.「連語論」への批判

奥田（1968-72）他の「連語論」について，斎藤（2016）は，

（ⅰ）言語単位の一つである
（ⅱ）名づけ的な意味を有する
（ⅲ）カザリ・カザラレという従属的な結び付きの関係を有する

という三つの面から特徴づけ，

（一）連語の単位性に関する問題
（二）連語の範囲について（特に）「主述の関係」を連語に含めるか否か
（三）連語（論）と文構造（論）との関わりに関する問題
　「むすびつき」と「構造」との関係について
　連語と「文の部分」との関わりについて

という問題点を指摘している。

最も問題になるのは（二）の「主述の関係」についてであろう。言語学研究会編（1983）も以下の事実を認めている。

…日本語のばあいは，つぎのような単語のくみあわせがあって，それが陳述的なむすびつきを実現している文であるか，従属的なむすびつきを実現している連語であるか，判断にくるしむことがおこってくる。

一郎は　髪が　しろい。
髪が（の）　しろい　一郎は……。
一郎は　足が　みじかい。
足が（の）　みじかい　一郎は……。
花子は　色が　しろい。
色が（の）　しろい　花子は……。

花子は　気性が　はげしい。

気性が（の）　はげしい　花子は……

（言語学研究会編（1983：8））

また，鈴木（2004）は奥田（1962）と同（1968-72）を対比しながら，以下のように批判している。

奥田の論文「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」を再考してみよう。第一章「対象的なむすびつき」として，まず，第一節「ありかのむすびつき」が論じられるのだが，そこでは，事物の現象も人間の動作も同一レベルで扱われている。次の用例を見てほしい。

庭におおきなびわの木があった。／となりの後家さんの家には二十三四の娘がいた。／気がついてみると，三吉は自分の細君のそばにいた。【引用注：例文の他の部分，出典，他の用例省略】

これらは，「ありかのむすびつき」の下位としての「a，存在のむすびつき」で列挙されている用例をそのまま示してみたものである。ここでは，「ある」「存在する」のような〈もの（無意志）〉の存在を意味する動詞も，「いる」「おる」のような〈ひと〉の存在を意味する動詞も，区別せずに扱われている。ごく常識的に考えてみて，〈もの〉の存在か〈ひと〉の存在かは，連語論が問題にするような「名づけ的な意味」に違いが生じるはずである。連語の体系全体を概観すれば，〈もの〉か〈ひと〉かで違いが生じるのだが，そのあたりのことが不問にされてしまっている。

第二節「ゆくさきのむすびつき」でも，カザラレ動詞の質的な違いが問題にされていないように思われる。その用例として，つぎのように記述されている。

それじゃ，山にいくのは，土曜日にしましょうか。／五時までには社にかえります。／電車は湘南の海にむかう客でいっぱいである。／だって，荷物をどしどしトラックにはこんでいるよ。【引用注：例文の他の部分，出典，他の用例省略】

これら「ゆくさきのむすびつき」として列挙されている用例のなかには，「山に行く」のような二単語の連語と「荷物をトラックに運ぶ」のような三単語の連語とが混在している。ごく常識的に連語の構造を観察するならば，自動詞「行く」か他動詞「運ぶ」かの違いに敏感でなければならないのではないだろうか。つまり，核となる単語（カザラレ）の名づけ的な意味を具体化させるという単語のくみあわせに注目するならば，自動詞「行く」は「～に行く」のように二単語のくみあわせを義務とするし，他動詞「運ぶ」は「～を～に運ぶ」のように三単語のくみあわせを義務とするはずである。奥田が「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」や「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」で論じていたような，連語の構造的なタイプの次元のことが「ニ格」では問われていないのである。…

（鈴木（2004：159-160））

日本語の「連語」について，「従属的なむすびつき」を明確にし，その範囲を確定することができるであろうか。

1.3. ロシア語「語結合論」—Vinogradov（1954）から

前掲のように，言語学研究会編（1983）には，「陳述的なむすびつき」「従属的なむすびつき」「構文論的なポジション」「modality と temporality とのプラン」等の概念が提示されているが，明確でない点が多い。

言語学研究会編（1983）には，Vinogradov（1954）「Вопросы изучения словосочетаний 語結合研究の諸問題」が言及されている[2]。そこで，Vinogradov（1954）が「словосочетание 語結合」をどのように規定しているかを見ていくことにする。

まず，「語結合」が以下のように規定される。

Изучая правила сочетаемости слов и форм слов, синтаксис, естественно, прежде всего обращается к тем грамматическим единствам, которые, возникая из сочетания слов по законам или правилам данного языка, выражают в составие предложения, единые, хотя и расчленные значения. Токого рода грамматические единства, называемые словосочетаниями, состоят не менее чем из двух полнозначных слов и являются строительным материалом для предложения. Только в составе предложения и через предложение словосочетания входят в систему коммуникативных средств языка. Рассматриваемые вне предложения, как строительный материал для него, словосочетания так же, как и слова, относятся к области номинативных средств языка, средств обозначения предметов, явлений, процессов и т. п. (Виноградов (1954: 231))

（統語論は，語と語形の結合可能性の規則を研究し，当然，まず所与の言語の法則・規則にそった語の結合から生じ，一体であるが分割された意味を文の構成において表すような文法的な統合体に取り組む。このような文法的な統合体は，語結合と呼ばれるのであるが，二つ以上の完全な語から成り，文の構築素材である。文の構成においてのみ，文を通してのみ，語結合は言語の伝達手段の体系に入る。語結合は，文の外でその構築素材として検討されるのであるが，語同様，言語の命名的手段の，物体，現象，過程等を名付ける手段の領域に属する。（Vinogradov（1954：231））

次に，「語結合」と「文」の違いが以下のように規定される。

Между тем словосочетание и предложение – качественно различные синтаксические категории. В отличие от предложения, словосочетание совсем не является цельной единицей языкового общения и сообщения. Для структуры словосочетания не характерны и не типичны те своеобразные так называемые «субъективно-объективые» синтаксические категории (вроде категорий лица, времени и модальности), которые обусловливают относительную законченность сообщаемой мысли в речи. Вместе с тем важность изучения словосочетаний как строительного материала для предложения несомненна. В правилах сочетания слов, в закономерностях образования разных вилов и типов словосочетаний ярко проявляется национальная специфика языка. (Виноградов (1954: 232))

（ところが実際には，語結合と文は，質的に異なる統語論的カテゴリーである。文とは異なって，語結合は，言語的コミュニケーションおよび伝達の完結した単位では全くない。語結合の構造にとっては，伝達される思考とことばの相対的な完結性を条件づける，独特の，いわゆる「主観－客観」統語論的カテゴリー（すなわち，人称，時制，叙法のカテゴリー）が固有でも典型的でもない。それとともに，文の構築素材としての語結合を研究す

る重要性は疑いがない。語の結合の諸規則においては，さまざまな種類と型の語結合を形成する諸法則性においては，言語の民族的特性がはっきりと現れる。（Vinogradov（1954：232)))

また，語結合の形成と性質については，以下のように述べられる。

Словосочетание организуется около одного знаменательного слова, являющегося стержнем словосочетания; это обнаруживается как в формальной, так и в смысловой его стороне. Конструктивные свойства словосочетания чаще всего опредедяются морфологическим строем его господствующего, стержневого слова. Словосочетанию так же, как и слову, принадлежит способность формоизменения, т. е. обладание системой форм. В связи с этим находится многообразие синтаксических функций одного и того же словосочетания, если его господствующее, стержневое слово является изменяемым. Например: *сторонник мира*, *стороника мира*, *сторонику мира* и т. д. (Виноградов (1954: 232))

（語結合は，一つの自立語の周囲に組織される，この語が語結合の要なのである：このことは，その形式的な面においても，意味的な面においても明らかになる。語結合の構造上の特質は，その支配する，中心である語の形態論的な構造によって，何よりも頻繁に明確になる。語結合には，語と同じく，形の変化の能力が，すなわち形の体系の所有が，固有である。従って，同一の語結合の統語論的な諸機能が多様に現れる，その支配する，中心である語が変化すれば。例えば：storonnik mira *平和の支持者(が)*，storonnika mira *平和の支持者の(を)*，storonniku mira *平和の支持者に*等々【引用注：順に，男性・単数・主格，男性・単数・属格/対格，男性・単数・与格】。（Vinogradov（1954：232)))

さらに，「主要な語」の品詞に基づく「語結合」の分類が提示される。

Словосочетание обычно образуется на основе слова, принадлежащего к той или иной часть речи, в соответствии с правилами сочетаемости этого слова с другими словами. Учение о словосочетании и его видах или типах в русском языке еще со времен «Российской грамматики» М. В. Ломоносова было тесно связано с учением о чатях речи. Отсюда возникла и группировка словосочетаний по стержневому, грамматически господствующему, главному слову, в зависимости от которого находятся другие слова в составе того или иного словосочетания. Различают словосочетания именные (субстантивные и адъективные), глагольные и наречные (или адвербиальные). Это различение очень важно. Есть синтаксические связи, типичные для отдельных частей речи (например, для глагола – сочетания с винительным прямого объекта, для существительных – с родительным определительным, с родительным субъект, а также с согласуемым прилагательным). Таким образом, правила образования словосочетаний прежде всего вытекают из морфологических свойств разных частей речи с присущим каждой из них кругом форм и категорий. (Виноградов (1954: 234))

（語結合は，通常，何らかの品詞に属する語を基礎にして，その語の他の語との結合可能性に応じて形成される。ロシア語における語結合とその形状・型についての学説は，エム・ヴェ・ロモノソフの『ロシア語文法』の時代からすでに，品詞についての学説と密接に結び付けられていた。このことから，何らかの語結合の構成において他の語がそれに依存して存在している，中軸の，文法的に支配する，主要な語による語結合の分類もまた生じた。名詞類の（名詞の，および，形容詞の）語結合，動詞の語結合，副詞の（副詞的の）語結合が区別される。この区別はきわめて重要である。個々の品詞に典型的な統語論的な関係が存在する（例えば，動詞にとっては—直接の客体の対格との結合，名詞にとっては—定語的な属格との，主体の属格との，また，一致させられた形容詞との）。このようにして，語結合を形成する諸規則は，第一に，その個々の領域に固有の形とカテゴリーを持つ，さまざまな品詞の形態論的な諸特性から導き出される。（Vinogradov（1954：234））

以上の部分からは，Vinogradov（1954）による，ロシア語の「語結合」について，

語と同様に文の構築素材であり，名づける手段であって，伝達単位ではない

人称・時制・叙法という統語論的カテゴリーが固有でない

主要な語が形態論的な語形変化の体系を持ち，それによって，統語論的諸機能を果たす

主要な語の品詞に典型的な統語論的関係が存在する

等をその特徴として挙げることができる。また，語結合が文に用いられ，主要な語がさまざまな文法的形式になる場合にも，依存する語の語形（例えば，動詞に依存する名詞の対格形式，名詞に依存する形容詞の性・数・格の一致した形）が「語結合」の根拠となっている。

2.「陳述的なむすびつき」

現代日本語において，「陳述的なむすびつき」をどのように扱えばよいのか。前掲のように，言語学研究会編（1983：6）は，「主語」と「述語」の「陳述的なむすびつき」を，「一方がものをさしだし，他方がそのものの特徴をのべる」「modality と temporality とからきりはなされたところでは成立しない。」としているが，「彼女は　美人だ。」「彼女は　美人だった。」という文においては，少なくとも「彼女」が「美人」であるという「特徴」の所有者であるという関係は変わらない。言語学研究会編（1983：6）による「modality と temporality とのプラン」「パラダイム」を，nominative の名詞に合わせた人称（および時制・叙法）形の動詞というロシア語の動詞の活用と，それに基づく文の規定と同一視はできない。

一方，「「は」「も」などによるとりたて…陳述的なもので，連語というレベルにおさまらないものである。「村へは　かえった」。」（鈴木（1972：27））のように，「陳述的なむすびつき」はいわゆる「主語」「述語」の場合には限らない。以下の場合も，「陳述的なむすびつき」ということができる。

(4) 魚春の，入り口から少しはいったところの壁には，一枚の写真が画鋲でとめてある。（小屋・10）

(5)「初夏のグランド・バザール」初日。他の百貨店ではまず真似のできない，トップ・シーズンの大売り出しである。（椿山・11）

例4では,「一枚の写真が画鋲でとめてある」が「壁」の特徴を述べている。例5では,「まず真似のできない」が「他の百貨店」の特徴を述べている。

ここでは，前掲の Vinogradov（1954）による，中軸の語がどのような語形でも用いられること，依存する語の語形が一定であること，という二点に注目してみる。なお，以下では，この二点の特徴を持つ場合，日本語についても「語結合」という用語を用いる。

日本語の「主語」が問題になる場合には「名詞+は」「名詞+が」共に言及されるが，一定の違いがある。それが明確に現れる一つの場合が，複文であろう。例えば,

> ハは，取り立てて，主題を際立たせ，末尾の述語と対応して，どんな複雑な文章でも，括る働きをして，文章全体をまとめていく。（増井（1997：58））

> ガは，普通の複文では，長い文章の一部分について，短いまとめ役を果たす。例えば「雨が降ったら，あすの運動会は，中止です」の文で，「雨が降ったら」の部分の，まとめ役の主体が，ガである。…（同上）

増井（1997）は，その例として，「私の住んでいるここ岡崎の地は，疏水が流れ，訪れる人々が憩いを求める貴重な場所なのです。」（同（同：59））を挙げている。最終的な結論として，以下のようにまとめている。

> ハは，キル機能である。正確には，「遮断」して「呼応」する機能である。切ったところで主題を示す。…ガは，まとめる機能である。「連節」の「核」の機能をガが果たす。ガを中心に従属節を作る機能だ。近くの数箇の連なった文節を，ガが主格となりマトメル機能である。…（増井（1997：218））

また,「従属句」を「A の類　ナガラ（継続）」「B の類　～ノデ　～タラ　～テモ　～ト　～ナラ　～ノニ　～バ」「C の類　～ガ　～カラ　～ケレド（ケレドモ，ケドモ，ケド）　～シ」に分ける南（1974：114-131）では,「名詞+格助詞」「主語（～ガなど）」A，B，C いずれも場合も「従属句」の中に「存在可能」であるが,「提示のことば（～ハなど）」は A，B の場合には「存在不可能」である，としている。

さらに,「動詞+のは」が用いられる場合にも,「名詞+が」はともなわれうる。

(6) 小沢尚人が ニューヨークに到着したのは，九月の中旬，まさにこの街が一番美しい季節を迎えたころだった。（『踊る大紐育』71）

例6は,「小沢尚人がニューヨークに到着した」という事について,「九月の中旬…」がその時点を述べる文である。この場合,「名詞+が　動詞+のは」は，例7の「広場に　出たのは」，例8の「野生動物に　むやみに　触れるのは」のような「名詞+が」をともなわない「動詞+のは」と同様に，文を構成する部分として用いられている。

(7) 広場に出たのは，久しぶりに信号のある小さな通りへ出たときだった。（男と女・47）

(8)「ええ。野生動物に むやみに触れるのはやめたほうがいい」（西日の・19）

以上のように,「名詞+が　動詞」は，動詞のどのような形においても文を構成する部分として用いられ，かつ,「名詞+が」と動詞の意味的関係は変わらない，ということができる。

「名詞+が　動詞」は日本語における「語結合」としてみなしうるものである。一方，「名詞+は/には/では」は，文全体の「述語」と結びつくものであって，動詞はどのような形においても用いられる，ということはできず，「名詞+は　動詞」を「語結合」として認めることはできない。

3. 日本語の語結合

以下では，現代日本語の「語結合」として，どのようなものがあり得るか，概観してみる。

3.1. 動詞結合

動詞が主要な語である語結合として，名詞の格形式（「名詞+が」他）を従属させるもの，副詞（形容詞のいわゆる「連用形」を含む）を従属させるものとがある。

3.1.1.「名詞+が　動詞」

前節で見たように，「名詞+が　動詞」は，日本語における語結合とみなすことができるものである[3]。

(9) 雨の音がきこえた。（再生・6）
(10) また灰色の一日が始まるのだ。（再生・6）
(11) 作業机に向かって受注伝票を捲っていると，店の呼び鈴が鳴った。（光媒・9）
(12) 冷たい霧がほほにかかった。こぬか雨が降っていた。（ラスト・13）
(13) 奥の家から人影がふたつ現れ，こちらへ向かってきた。（ラスト・17）

例 9「(雨の) 音」は「聞こえる」の，例 10「一日」は「始まる」の，例 11「呼び鈴」は「鳴る」の，例 12「霧」は「(ほほに) かかる」の，「こぬか雨」は「降る」の，例 13「人影」は「現れる」「(こちらへ) 向かってくる」の，各主体を表している。これらの場合には，文の構築素材としての「名詞+が　動詞」が，それ自体文で文になっている，ということができる。

3.1.2.「名詞+を　動詞」「名詞+に　動詞」

「名詞+が」以外の場合も，「格」形式を媒介に動詞と結合する場合，その名詞が文中でどのような意味になるかは明確である。格形式は動詞がどのような用いられ方をしても変わらない。「名詞+が　動詞」の他にも，格形式を媒介とする名詞と動詞の結合は，日本語の語結合とみなすことができる[4, 5]。以下，格形式を媒介とする名詞と動詞の語結合のいくつかを見ていく。

「名詞+を」「名詞+に」どちらも，動詞の語義に必要な物・人・場所等を補い，その文中の意味は動詞によって決定される。「名詞+を」は，結合する動詞の語義の特徴に応じて，(14) (15) 動作を受ける対象，(16) 出発地点，(17) 通行地点，等を表すことになる。「名詞+に」は，結合する動詞の語義の特徴に応じて，(18) (19) (20) 動作の相手，(21) 存在地点，(22) 目的・到着地点，等を表すことになる。

(14) ドアを開けて，声をかけた。（再生・6）
(15) つかまえてやろうと思っても，私の体は土の上で死にかけている魚みたいに重たくて，自分の腕をどうやって動かしたらいいのかさえ，わからないのだ。（春の・5）
(16) 三時すぎ孝平は「二十分で戻る」と傍らにいた柴田にいいおいて，研究室を出た。（丘の・197）
(17) みんな口々に勝手なことを言いながら，磨きこまれた渡り廊下を通って，庭に囲まれた離れの座敷に通された。（六番目・277）

(18)「日本で調べられるだけのことは調べたし，わざわざパリに寄って志摩先生に会ったのも，アフリカをよりよく知るためだったじゃありませんか」（雲の（上）・36）

(19) 佐々木さんは，巨大なうさぎの頭部を私に突き出した。「あんたにあげようと思って」（ポプラ・85）

(20) 敦子の割り当ては大学本部や図書館への配達だったが，のんびりした，長身の同級生の間垣に代わってもらった。（雲の（上）・97）

(21) 屋敷のすぐそばに高い木が立っています。（暗黒・8）

(22) 翌朝，会社に行くとすぐ，信夫は和倉礼之助に，午後から休ませて欲しいと，早退の届けを出した。（塩狩・257）

以上の「名詞+を」「名詞+に」は文脈によって明白でない限り，省略不可能であろう。

3.1.3.「名詞+から　動詞」「名詞+まで　動詞」「名詞+へ　動詞」

これらの格形式は，それ自体が自立的に意味を持ち，動詞の語義の特徴によって，結合可能かどうかが決まる。(23)(24)「名詞+から」は範囲の始点を，(25)(26)「名詞+まで」は範囲の終点を，(27)(28)「名詞+へ」は移動の方向／目的・到着地点を，それぞれ表している。

(23) キャビネットの引き出しからゴム印の注文用紙を取り出して渡した。（光媒・9）

(24) 暗い海から届く潮騒や，夜の森で降り積む椿の花。（光・5）

(25) 知らない男の人が，すぐそばまで来て舌を出して逃げていく。（春の・5）

(26) ちょうど郵便逓信隊がここまで荷物を運んで来るという話だったんで，渡りに船とついてきたんですよ。（山妣（上）・29）

(27) 仕方なく，寒いホームへでることにした。（モダン・36）

(28) 千秋が私に内緒であなたに手紙を書き，どうやらそれを大家のおばあさんのところへ持っていっているらしいとわかると，おばあさんに苦情を言ってしまったのです。（ポプラ・199）

形式自体が自立的に文中の意味を持つ，これらの格形式の名詞は，動詞に情報を付加し，詳細に述べるものである，ということができる。

3.1.4.「名詞+で　動詞」

「名詞+で」は，名詞の語義の特徴によってその文中の意味が決定される，すなわち，動詞から独立的に「名詞+で」の文中の意味が決定される，ということができる。(29)「ナプキンで」は動作の道具を，(30)「地下鉄で」は移動の手段を，(31)「本郷で」は出来事の地点を，(32)「バテ気味で」は動作の様態を，それぞれ表している。

(29) 銀髪の日焼けした男はナプキンで口を拭いた。（雲の（上）・12）

(30)「タクシーはつかまらんでしょう。オデオンまでいって地下鉄でいらっしゃい。」（雲の（上）・13）

(31) 明治十年の二月に永野信夫は東京の本郷で生まれた。（塩狩・5）

(32) 容子が珍しくバテ気味で階段を登っている。（六番目・57）

これらの場合，自立的に文中の意味を持つ「名

詞+で」が動詞に情報を付加し，詳細にしている，ということができる。3.1.3 で見たいくつかの格形式の名詞とその点で共通しているが，その文中の意味を決定する要因は異なる。

3.1.5.「副詞　動詞」

形容詞（「形容動詞」を含む）に由来する副詞は，いわゆる「連用形」，「～く」「～に」という形において動詞と結合する，という特徴がある。

(33) 私は何か「どうだ」と言いたいような気持ちになって，息を大きく吸い込んだ。（ポプラ・12）

(34)「じゃ，外へ出て元気にあそびましょうね」（塩狩・10）

それ以外の副詞の場合には，隣接して用いられる，ということのみが結合の根拠となる。

(35) ゆっくり昇ってゆく古風なエレベーターで最上階に着くと，すぐ目の前のドアをあけた。（雲の（上）・45）

3.2. 名詞結合

3.2.1.「名詞+の　名詞」他

中軸の語である名詞が文においてどのように用いられても，依存する名詞は常に「名詞+の」，あるいは，「名詞+からの/までの/への/での　名詞」という形において用いられる。

(36) 先生は信夫の頭をなでた。（塩狩・10）

(37) 銀髪の男は腕時計をのぞきこんだ。（雲の（上）・12）

(38) 駅前の商店街を抜けると，消防署があった。（ポプラ・13）

(39) 本当に大吉さんの言うようにフランスは革命の国かもしれない――三上敦子はミッテランの勝利に酔いしれている群衆の熱狂ぶりを見てそうつぶやいた。（雲の（上）・20）

(40) 新しい住処を決めることから，前の家の始末，そして引っ越しと，普段のおっとりした性格からは考えられない迅速さで，母はすべてをこなした。（ポプラ・17）

(41) そしてその冬いちばんの寒波の襲来をニュースが告げた日，学校から帰ると，郵便受けにオサムくんからの手紙が届いていた。（ポプラ・136）

(42)「それは，実は，治安当局からの命令でありまして，両名が発見され次第，拘置するようにということでありました」（雲の（上）・321）

(43) 校門からキャンパスの中央までの通路を学生たちがぞろぞろ歩いてゆく。（雲の（上）・61）

(44) 私は爪先立って布団に戻ると，さっきまでの苦い後悔などすっかり忘れて，ことんと寝ついてしまった。（ポプラ・165）

(45) 母が予想したとおり，私の「そこにいない父」への憧れは，殊に十代のある時期，途方もなく膨れ上がった。（ポプラ・204）

(46) このところ海外に出ると，どこへいっても日本への風当たりが強い。（雲の（上）・26）

(47) 郡司薫は，ロビーでの話が一段落したとき，もうすこしこみ入った話をしたいが，今夜の食事を付き合って貰えないか，と言った。（雲の（上）・132）

3.2.2.「形容詞　名詞」

形容詞（「形容動詞」を含む）は，「～い」「～な」

という，丁寧体でない，いわゆる「連体形」において名詞と結合する。

(48) 五月のながい夕暮が，白い蝋でできたような花を枝いっぱいにつけた並木の上に，淡い紫を含んだ色合いで漂っていた。(雲の（上）・12)

(49)「ぼくのおとうさまを，自分のおとうさまだなんて，おかしな奴だ」(塩狩・25)

3.3. 形容詞結合―「名詞+が　形容詞」

結合相手の「名詞+が」によって，形容詞が表す性質・状態の対象が表される。

(50) ほかの兄弟たちと違い，その鴉は映画が好きでした。(暗黒・8)

4. まとめと課題

以上から，現代日本語において，中軸の語がどのような形においても用いられ，同時に，その文の中での役割とは独立的に，依存する語が常に一定の形を保つ，ということに基づいて，日本語において「語結合」とみなしうる語のまとまりを取り出すことができる。例えば，

Ⅰ.「格」形式を媒介にした，名詞と動詞・名詞・形容詞との結合

「名詞+が　動詞」「名詞+を　動詞」「名詞+に　動詞」「名詞+から　動詞」「名詞+まで　動詞」「名詞+へ　動詞」「名詞+で　動詞」「名詞+の/からの/までの/への/での　名詞」「名詞+が　形容詞」等

Ⅱ.「連用形」による形容詞（「形容動詞」を含む）由来の副詞と動詞との結合，「連体形」による形容詞（「形容動詞」を含む）と名詞との結合

しかし，形容詞と名詞の結合の場合，「～かった」という形で用いられ，時制が問題になる場合がある。語結合として扱うことが適切かどうか，検討の必要がある。

(51)「西欧社会は，今までよかったもののおかげでいいんだし，今まで悪かったものせいで悪いんです。この社会はそれだけの社会ですよ」(雲の（上）・30)

また，動詞が名詞を修飾する場合には，「～する」「～した」両方の形が用いられる。これらをどのように扱うかは，さらに大きな問題である。

(52) 桜井はギャンブルと名がつけば何にでも夢中になる男だった。(雲の（上）・212)

(53) さっきまで夕焼けの拡がっていたリュクサンブール公園の上の空から，赤い輝きが失われ，横に縞になった雲のへりに，わずかに樺色がにじんでいた。（雲の（上）・11)

【参考文献】

奥田靖雄（1962）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会編（1983：281-323））

――――（1968-72）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会編（1983：21-149））

言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

斎藤倫明（2016）「「連語」と「文の成分」―教科研文法の「連語」概念の検討を通して―」『文化』第80巻第1・2号15-36

鈴木康之（2004）「奥田靖雄の連語論」『国文学解釈と鑑賞』平成16年1月号152-161至文堂

増井金典（1997）『「が」と「は」についての研究』滋賀女子短期大学
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
宮島達夫（2005）「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』平成 17 年 7 月号 6-33 至文堂
Виноградов, В. В. (1954) Вопросы изучения словосочетаний.
Избранные труды. Исследования по русской грамматике. Издатедьство «Наука», 1975

【用例】

浅田次郎『椿山課長の七日間』集英社文庫／有川浩『レインツリーの国』新潮文庫／石田衣良『再生』角川文庫／乙一『暗黒童話』集英社文庫／恩田陸『六番目の小夜子』新潮文庫／川上弘美『小屋のある屋上』（『どこから行っても遠い町』）新潮文庫／志水辰夫『ラストドリーム』新潮文庫／辻邦生『雲の宴（上）』朝日文庫／坂東眞砂子『山妣（上）』新潮文庫／三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫／三浦しをん『光』集英社文庫／道尾秀介『光媒の花』集英社文庫／山田太一『丘の上の向日葵』新潮文庫／湯本果樹実『西日の町』文春文庫『春のオルガン』『ポプラの秋』新潮文庫／吉田修一『モダンタイムス』『男と女』『踊る大紐育』（『あの空の下で』）集英社文庫

【付記】

本稿は 2017 年 8 月 27 日に開催された「第 3 回朝鮮語及び周辺諸言語研究会」における口頭発表の内容を元にした。なお, 3.1.1−3.1.4 は, 拙稿（2016）「現代日本語名詞の「格」記述のための序論―格形式と意味決定要因―」（『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 1　―小出慶一教授退職記念論文集―ことばの本質を求めて』44-56）, 同（2017）「現代日本語の連用成分についての一考察―名詞の文法的意味・動詞の語義から―」『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2　―仁科弘之教授退職記念論文集―言語についての X 章』142-156）に基づく。

---

[1] 宮島（2005：6）は,「これは研究会編の論文集という形になっているが, ヲ格・ニ格・デ格という中心的な部分, 分量にして七割ほどは奥田靖雄氏の手になるものであり, …また, 巻頭には…「編集にあたって」という文章があるが, これも奥田氏のつよい指示にしたがってかかれたものである。だから, この本は奥田氏個人の著作にちかい。」と述べている。

[2] 奥田（1976：84）には,「Грамматика русского языка, том Ⅱ, 1954 г. にあたえられているヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフの序説を参照せよ。」という「注 1」が載せられている。宮島（2005：11）は,「1960 年のアカデミー文法」の「連語論についての概論」には, Vinogradov（1954）が「ほとんどそのまま, とりいれられていて, ひじょうにくわしいものである。」と述べている。

[3] 主体を表す名詞と動詞との結合が文の一部として用いられる場合には,「名詞+の　動詞」となる場合がある。
○さっきまで夕焼けの拡がっていたリュクサンブール公園の上の空から, 赤い輝きが失われ, 横に縞になった雲のへりに, わずかに樺色がにじんでいた。（雲の（上）・11）

[4] 名詞の格形式から見た結合相手の動詞の語義の特徴については, 宮島（1972：669-670）の以下の記述を参照。

> …他の単語の語形によって示された条件というのは,「文法的文脈」といいかえることができるだろう。たとえば,
>
> まちへ　かえる（移動）
> まちを　つくる（はたらきかけ）
> まちで　あそぶ（動作）
> まちに　いる（存在）
>
> 等では, それぞれ, 動詞自身の語形ではなくて, これと結びついている「まち」という名詞の語形が,これらの動詞にとって文法的条件になっているのである。「まちへ」「まちを」等と名詞の語形がそれぞれにちがっていることが, これと結びつく動詞の意味的な側面を明らかにする。たとえば「まちへ」というかたちと結びついていることは,「かえる」という動詞がそのような帰着点を必要とする移動の動作をあらわすことを示している。「まちを」という名詞のかたちと結びついていることは,「つくる」が, 何か対象に対してはたらきかけるという側面をもった動詞であることを示している。...他の単語との結びつきによって明らかになる条件は, その単語の構文論的（連語論的）性質のあらわれである。

[5] 宮島（1972：686-687）の以下の記述を参照。

> …動詞の文法的性質のうちで意味記述ともっとも直接に関係するのは, 連語論的性質だ。形態論的な, あるいは（せまい意味での）構文論的な性質は, これにくらべれば, より純粋に文法的なもので, これを細分してい

っても実質的意味には達しない。これに対して連語論的性質は，はじめからそのうちに実質的要素をふくんでいる。連語とは，ほかの単語とのむすびつきだから，語い的条件がきりはなせない。

道を　つくる
道を　ながめる
道を　あるく

これらにおける名詞と動詞との関係は，それぞれちがっている。つまり，これらはちがった型の連語に属する。この連語としての関係そのものは文法的なものであり，したがって，このような名詞とむすびついてこのような関係をつくりうることも，おのおのの動詞の文法的性質（能力）ではあるが，その性質をささえているものは，これらの動詞の意味上の性格である。そして，文法的なむすびつきを細分していくと，それはしだいに語い的なむすびつきとしての性格をつよめ，そのさかい目は，はっきりしない。…